

シンポジウム「翻訳の諸相」をめぐって

梅林 博人

1. はじめに

第61回表現学会全国大会は、令和6年6月8～9日に桃山学院大学で開催され、初日のシンポジウムは、登壇者に植山俊宏氏（京都教育大学）、袖川裕美氏（関西外国語大学）、柳澤浩哉氏（広島大学）を迎えて、「翻訳の諸相」というテーマで行われた。

本稿では、今回のシンポジウムの趣旨、「広義の翻訳」の内実、今後の展望などを述べるが¹⁾、趣旨については、運営委員会での発案の状況や登壇者によるその後の検討といった経緯を添えることで分かりやすさが増すと考えられることから、次章ではそうした内容から始めることにしたい。

2. シンポジウムの趣旨―発案の状況および企画の検討を添えつつ―

2-1. 発案の状況

前年度7月29日の編集・運営委員会でシンポジウムの内容を「翻訳」とすることが決定されたが、その席上では、今回取り扱った「教育現場における日本古典文学の現代語訳」、「音声言語の翻訳（通訳）」、「小説の映像化（脚色、アダプテーション）」以外にも、次のような例が挙げられた。「日本語教育におけるやさしい日本語」、「方言と共通語との言い換え」、「辞書における語義解釈」、「国立国語研究所が提唱する病院の言葉を分かりやすくする工夫」「文化庁が指摘する過度の外来語の使用に際してのカタカナ語の言い換え」など。

一般に「翻訳」は、「ある言語で〈話され／書かれ〉たものを、ほかの言語に〈直すこと／直したもの〉」（『三省堂国語辞典』第八版）と解されるが、上記の様子から同委員会では、翻訳を「もの」としてではなく「こと」として扱うことが想定されていると理解された。

また、挙げられた例を見ると、ある言語をほかの言語に置き換えるといった、いわゆる「狭義の翻訳」にとどまるものばかりではないことから、あるいは、以下に挙げるヤーコブソンの三種類の翻訳を研究対象とする「広義の翻訳」を考えて、翻訳という「こと」の多様性（すなわち、翻訳という行為の多様性）についての追求、なども期待されているのかもしれないと推察された。

《ヤーコブソンの三種類の「翻訳」》

- 1) 言語内翻訳(言い換え rewording): ことばの記号を同じ言語の他の記号で解釈すること。
- 2) 言語間翻訳(本来の翻訳 translation): ことばの記号を他の言語で解釈すること。
- 3) 記号法間翻訳(移し換え transmutation): ことばの記号をことばでない記号体系の記号によって解釈すること。

(ロマーン・ヤーコブソン(1973) pp.57-58により要約)

表現学会会員諸氏の研究領域・分野・内容がきわめて多彩であることを考えれば、翻訳を広義に捉えようとする姿勢は自然なことである。

そこで、今回のシンポジウムでは、「翻訳」を「原語・原表現から異言語・異表現への置き換え」と広義に捉え、三種類の翻訳について種々相を見ることとし、テーマも「翻訳の諸相」とすることにした。

2-2. 企画の検討

次いで、「言語内翻訳」、「言語間翻訳」、「記号法間翻訳」の具体的な内容と登壇者の決定が課題となったが、幸いにも運営委員会で柳澤浩哉氏が登壇者に立候補して下さり、かつ、その時点で、「小説の映像化」という「記号法間翻訳」に当たる発表テーマをお示し下さった。また、登壇者の選定については、安井寿枝事務局長の多大なる協力を得た。

そこで三人で残る二つの翻訳について検討したが、それに際しては、過去の表現学会との継承を考えることが有効であった。具体的には、次に挙げる第38回大会のシンポジウムである。

第38回表現学会全国大会(平成13<2001>年6月2~3日、於長崎外国語大学)
シンポジウム「テーマ：翻訳文と表現学」

司会者 畠中康男氏(日・英翻訳文学)

登壇者 呉羽長氏(日本古典文学の現代語訳)

萩原寛氏(スペイン語から日本語への翻訳)

藤田保幸氏(ウィリアム・テル譚の翻案『回天之弦声』の性格)

(藤岡克則(2001)により要約)

二十年以上前の今世紀初頭でのシンポジウムでも、日本古典文学の現代語訳や、翻案作品を「広義の翻訳」として取り上げている点がおおいに参考となった。歴史ある表現学会ゆえに継承もまた有意義と考え、今回も「言語内翻訳」については、日本古典文学の現代語訳を取り扱うこととした。

ただ、継承のいっぽうで、今回のシンポジウムならではの独自性も考慮した。第38

回大会のシンポジウムのテーマや内容から、そこでは、主に研究の面から現代語訳を扱っていたのではないかと察せられた。そこで、今回は、古典の現代語訳を扱うもう一つの代表的な場である「教育」という要素を加え、「国語教育において翻訳とは何か」という観点からの考察という内容も取り入れることとした。

なお、この第38回大会の振り返りを通じて、「広義の翻訳」という術語の理解が、その時々で異なっていることにあらためて気づかされた。この点は、翻訳研究のこれまでとこれからに関わることでもあるので、後述する。

さて、最後に残った「言語間翻訳」であるが、これについては、英語一強時代とも言われる今日の社会的状況を顧みると、「日本語と英語との間での翻訳」を取り上げること自体はきわめて自然に決定された。ただ、それだけに、たとえば前回と同様に日・英文学作品を考察対象とした内容では、今回のシンポジウムとしての独自性に欠けるものになってしまうことも明白であった。

ここでも、従来あまり取り上げられていないことは何かを問う必要があり、その結果としてたどり着いたものが音声言語への注目であった。

従来、翻訳という語は、書かれた作品のような静的な言語情報を別の静的な言語情報に置き換えるといったイメージが強かったのではなかろうか。また、音声言語の翻訳には「通訳」というそれを指す専用の用語があったためかもしれない。筆者には書き記されたものを扱う印象が強かったことから、今回は、音声表現を扱うという内容を取り入れてみることにした。

こうしてシンポジウムの骨子が固まったのであるが、三種類の翻訳の内容をあらかじめかなり限定的に考えたために登壇者の確保が懸念された。しかしながら、事務局長のご尽力と各登壇者のご快諾を持ってこの懸念は霧消した。あらためて、各位にはお礼を申し上げる。

2-3. 本シンポジウムの趣旨

本節では、これまでの記述を踏まえて、本シンポジウムの趣旨を以下の三つにまとめる。

【1】今回のシンポジウムでは、「翻訳」を「原語・原表現から異言語・異表現への置き換え」と広義に捉え、そうした置き換えが行われる場面を以下の(1)～(3)の三点に絞り、〈等価性〉や〈置き換えにあたっての文法〉を意識しながら、置き換える際の制限、問題点などをあぶり出し、翻訳とはどのような表現行為であるのかを、登壇者の専門的見地から考察する。

- 1) 同一言語内での置き換え〈日本古典文学の現代語訳〉
- 2) 異言語への置き換え〈日本語と英語との間での通訳〉
- 3) 異ジャンルへの置き換え〈小説の映像化(脚色、アダプテーション)〉

【2】「翻訳」を異なる言語や異なる表現様式への置き換えと捉えれば、各研究者の

研究および社会活動には、それに類するものが少なからずある。それゆえ、本シンポジウム参加者の一人一人が、それぞれに引きつけてシンポジウムの内容を柔軟に考えることができるのではないと思われる。

【3】「翻訳」を「こと」として捉え、その研究対象をあらためて考えることで、「翻訳」の射程の広がりを認識するとともに、近年の翻訳学の転回（「文化的転回〈cultural turn〉」、「社会的転回〈social turn〉」、「技術的転回〈technological turn〉」）を認識する。

今回のシンポジウムでは、「翻訳」を謳いながらも個別の翻訳作品の分析が必ずしも多くはなかったが、それは、このシンポジウムが以上のような趣旨に基づいて準備されたためである。

3. 「広義の翻訳」の解釈をめぐる

今回は、「翻訳」を「広義の翻訳」と解して三種類の翻訳を扱ったが、この「広義の翻訳」という語は第38回大会シンポジウムでも用いられており、しかも、今回とは、その内実が異なっている。

本節では、こうした「翻訳」研究における用語の内実の問題についてふれてみたい。

3-1. 第38回大会の「広義の翻訳」

第38回大会の登壇者である藤田保幸氏は、藤田保幸（2001）の冒頭で、翻訳に類するものの内訳を、

1. いわゆる「逐語訳」
2. いわゆる「意識」
3. いわゆる「乱訳」「豪傑訳」などと呼ばれたもの（＝原文の内容を摘要しつつ、自由に訳する）
4. いわゆる「翻案」（＝原文の内容を生かしつつも、改変を加える）

と概観したうえで、次のように述べている。

今日一般に「翻訳」と呼ばれるのは、1 2である。しかし、3 4も、原テキストの内容を、忠実さの度合こそ違え、何らか写しとって新たなテキストを構成するものである点で、1 2と連続するといえる。1 2のみならず、小稿では3 4をも「広義の翻訳」と考えることにしたい。

第38回大会では、『源氏物語』の現代語訳も扱われているので、「言語内翻訳」と「言語間翻訳」は意識されているものの、「記号法間翻訳」については考慮されていないよ

うである。

それを踏まえて藤田保幸(2001)からの引用を見ると、この「翻訳」では、訳出する先(翻訳学でいう「目標」)を言語的なものに限定していることがうかがえる(引用内に「テキスト」とある。記号法間翻訳に有る映像などは意識されていない模様)。そして、「忠実さの度合こそ違え、何らか写しとって」という記述からは、翻訳されたテキストに見られる「等価」性を問題としていることも分かり、さらに、「1 2と連続する」という記述からは、当時一般には、訳出された「目標」(翻訳)を「等価」性の高低によって「等価」性の高いものは「翻訳」、低いものは「翻案」と見なしていたことも理解される。

したがって、この藤田氏の場合の「広義の翻訳」は、「等価」の高低で「翻訳」「翻案」と区別せずに、多少なりとも「等価」性が認められるものは(=「何らか写し取って」いるものは)、「広く」「翻訳」とする(「翻案」という別語は用いない)、ということになろう。

端的には、「翻案」を「翻訳」に取り入れた結果、術語「翻訳」が、「翻訳」も「翻案」も指すようになったこと(つまり単語における意味の拡充)をとらえて、「広義の翻訳」としていると言えよう。

3-2. 今回の「広義の翻訳」

これに対して、今回のシンポジウムで用いた「広義の翻訳」には、二つの意味がある。

①訳出する先が言語的なものではない²⁾、言わば、「翻訳」らしからぬ「記号法間翻訳」を「翻訳」と見なすことで、術語「翻訳」の意味は拡充する。その状況を捉えて「広義」とする。

②「言語内翻訳」に該当するものには、「翻訳」という語が使われていない場合がある(例「古典の現代語訳」「方言の共通語訳」、「分かりにくいカタカナ語の言い換え」など)。それらを「翻訳」に取り入れることで、術語「翻訳」の意味は、「翻案」を取り入れた以前よりもさらに拡充する。その状況を捉えて「広義」とする。

こちらも端的に言えば、術語「翻訳」の意味が拡充しているからということなのであるが、注意したいのは、第38回大会の時の「広義の翻訳」に比して、「翻訳」によって指し示される言葉の置き換え行為が増えている点である。

3-3. まとめ

欧米を中心に台頭した翻訳学に基づく近年の翻訳研究は新しい。日本においても、日本通訳学会が2008年に日本通訳翻訳学会に改名して以降に「翻訳学」が表立ってきたようで、学界自体の隆盛が20世紀後半以降と見ても差し支えないようである。

そのため、翻訳学の研究対象は以前に比べ広がっており、それと連動して用語も多様化しているようである。

今回、「広義の翻訳」によって確認したが、用語自体が何を指しているのかを確認することが、最近の「翻訳学」においては特に肝要で有ると思われる。

4. 今後の展望

2-1 で見たように、国語辞典で「翻訳」を引くと、ある言語を他の言語に置き換えることといった、いわゆる狭義の翻訳についての説明が現れる。そのため、私たちは「翻訳」の研究対象を限定的に考えてしまいがちである。

しかし、今日の翻訳学の研究対象は多岐に渡っており、かつ、その対象はさらに広がる様子を見せている。鳥飼玖美子編著(2013)は、その点を次のように記している。

研究の対象は、翻訳の産物(目標テキストそのもの)、プロセス、機能(翻訳の役割や目的)、翻訳者に焦点を当てたものなど多岐にわたります。また、翻訳という言葉が示すものを、ある言語で書かれた文章を別の言語で表現し直すという一般的な見方よりも、もっと幅広いものとして捉えるアプローチもあります。たとえば、移民によって、出身地の文化と移住先の文化が混じり合うこと、集団の中で物語や詩歌が口から口へと代々受け継がれること、思想と文化と政治がお互いを映し出し合っていることなども翻訳と捉えるような研究です。(p.111。原文は読点ではなくカンマを使用)

こうした説明は、国語辞典の「翻訳」の説明とは大きな隔たりがある。したがって、研究に携わる身としてまず行うべきことは、翻訳学の現状を把握し、「狭義の翻訳」観から脱却することであろう。

現在の翻訳研究の対象は、「狭義の翻訳」観が抱く研究対象とは異なって、きわめて多様である。その多様性に気づいた後に、これまでの自身の研究との接点やこれまで過ごしてきた環境との接点を考えてみると、大小硬軟のいわゆる研究の種が見つかるのではないかと思われるのである。

たとえば、今回のシンポジウムで登場した「国語教育」「古典文学の現代語訳」「小説の映像化」などのキーワードからは、古典文学や近代小説を漫画化したもの(図書館にあるようないわゆる学習漫画本など)を記号法間翻訳の一例と見て研究を検討するなどの発想が各自において有り得るのではないかと考えるのである。

5. おわりに

今回のテーマである「翻訳」については、筆者自身、外国語を日本語に訳すことという「狭義の翻訳」のイメージが強かったため、登壇者とのやり取りの段階から、驚かされることが少なくなかった。たとえば、植山氏から、「『翻訳』という用語が国語教育において使用されることがない」と聞いた時には、なるほどと頷く一方で、『スイミー』、『少年の日の思い出』などの翻訳や『羅生門』、『山月記』、『形』などの翻案を教科書であれば見てきたにもかかわらず、そこに「翻訳」という用語や概念があまり介在しなかったという印象や記憶については、たいへん不思議な思いがした。

学会におけるシンポジウムの役割は、会員諸氏に研究の契機や情報を提供することに有ると考えるが、今回それらの提供を最も受けたのは登壇者ではなかっただろうかと思うほど、いろいろ考えさせられることの多い担当期間であった。

会員の諸氏においても、登壇者に劣らぬ契機や情報の提供や発見などがあることを切に願う次第である。

注

- 1) 個々の登壇者の発表内容の詳細については、本誌に掲載される各氏の論考を参照されたい。
- 2) 今回のシンポジウムでは、非言語的なものは「映像」のみであったが、たとえば、「一編の詩の内容を油絵によって表現する」、「ある小説の内容をピアノ演奏で表す」といった記号法間翻訳では、訳出する先が非言語的な「油絵」、「ピアノ演奏」である。

謝辞

前年度にシンポジウムの内容を「翻訳」にすることが決定され、その後、企画から発表に至るまでの約十ヶ月の間に、登壇者の植山俊宏氏、袖川裕美氏、柳澤浩哉氏、および事務局長の安井寿枝氏と議論を交わす機会に恵まれた。またシンポジウム当日は、会場から各発表に対して多数の質問カードをいただいた。積極的に質問をお寄せ下さった会員諸氏には記してお礼を申し上げます。当初、シンポジウムの後半には、〈登壇者間での質疑応答、質問カードへの回答、各登壇者および司会者のまとめ〉を予定していた。が、各発表に対して想定を大幅に上回る質問カードをいただいたことから、一部を省略して回答時間を十分に確保した。会場と登壇者とのやり取りを尊重した次第である。

参考文献

- 北林利治/杉山泰/リチャード・ボナン/西村友美 (1998)『初めて学ぶ翻訳と通訳 言語コミュニケーション入門』松柏社
- 呉羽長 (2001)「日本古典文学の現代語訳—『源氏物語』の場合—」『表現研究』第74号 表現学会
- ジュレミー・マンディ (2009)『翻訳学入門』みすず書房 (鳥飼玖美子監訳)
- 鳥飼玖美子編著 (2013)『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房
- 畠中康男 (2001)「日・英翻訳文の表現学的考察」『表現研究』第74号 表現学会
- 藤岡克則 (2001)「第38回表現学会全国大会報告」『表現研究』第74号 表現学会
- 藤田保幸 (2001)「広義翻訳作品としての蘆田東雄『字血句涙・回天之弦声』の性格」『表現研究』第74号 表現学会
- フランツ・ポエヒハッカー (2008)『通訳学入門』みすず書房 (鳥飼玖美子監訳)
- 三宅雅明編著 (1986)『翻訳の表現 表現学大系 各論篇第25巻』表現学会監修

モナ・ベイカー&ガブリエラ・サルダーニャ編 (2013)『翻訳研究のキーワード』研究社(藤濤文子監修・編訳、伊原紀子/田辺希久子訳)

柳父章・水野的・長沼美香子編 (2010)『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』法政大学出版局

ロマーン・ヤーコブソン(1973)『一般言語学』みすず書房(川本茂雄監修、田村すゑ子/村崎恭子/長嶋善郎/中野直子/共訳)

(相模女子大学)